霧の旅路

海渡英祐

角川書店

霧の旅路
海渡英祐

昭和五十三年四月二十日　初版発行

発行者　角川春樹
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二―十三
〈電〉〇三（二六五）七一一一　大代表
〈振〉東京三―一九五二〇八〈郵〉一〇二

旭印刷・宮田製本

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0093-872218-0946(0)

目

次

不死鳥の季節――七
光と影――二一
運命の糸――三六
失われた事実――四九
過去の構図――六三
挑戦者――七九
暗中模索――九三
悪夢の時――一〇九
罠への誘い――一二三
第二の犠牲者――一三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

忍びよる影——一五一
灰色の背景——一六六
疑惑の渦——一八〇
多元方程式——一九二
第三の男——二〇六
積極的な逃亡——二二〇
待ちうけるもの——二三四
旅の終り——二四九
あとがき——二六八

裝丁　空山基

霧の旅路

不死鳥の季節

空はまだ明るいが、大都会のビルの谷間には、夕闇が忍びより始めていた。そろそろ退社時刻である。煙草の煙と疲労感が重くよどんでいる室内に、さざ波のようにざわめきが拡がって行き、ほっとした空気がただよい始める。

伊原加奈子は自分の席を離れて、手洗いへ立って行った。オフィスの人々の視線が、一瞬、自分の背中に集中したような気がして、彼女は強く唇を噛みしめた。もちろん、それは思いすごしというものだろう。日常のきまりきった行動にまで、人々が好奇の眼をむけるわけはない。しかし、一日の勤務から解放される時が来ると、加奈子はいまさらのように、自分のみじめさを意識しないわけにはいかなかった。

冷笑とあわれみのまじった視線が、自分の背中にはりついている。無言のうちにかわされる噂話が、執拗に耳に入って来る。自分の体のまわりにだけ、重苦しい、冷え冷えとした空気がまつわりついている……。

手洗いの鏡の前に立って、加奈子は自分の顔を見つめた。細おもてで、彫りの深い、カチッと整った感じの顔。何となく理智的で勝気そうな印象を与えるのが、ちょっと気になるところで、もう少し華やかさやコケティシュな雰囲気があってもいい、という感じはするけれども、自分でも、まあまあだと思っている顔だ。客観的に見ても、いちおう美人の部類に入るだろう。だけど、いまその顔には、隠しようもなく、暗い表情が色濃く浮かび上っている。

退社時の手洗いは、化粧なおしの女性たちで混みあっていた。娘たちは浮き浮きした顔で、はずんだ声を上げている。若い肉体から発散するエネルギーが、あたりに渦巻いている。つい先日までは、二十五歳の加奈子もその中の一人だった。だが、いまは違う。彼女の心も体も、急に若さを失ったみたいで、気むずかしげな顔のオールドミスのように、手洗いの中に、ひとり異質な空気を持ちこんでいるのだ。

逃げるように、加奈子は手洗いをあとにした。何もかもが、すっかり変ってしまった。いや、本当は変ったのは彼女自身で、周囲のものにべつに変りはないのだけれども、眼にうつるもの、心に感じるもののすべてが、以前とはすっかり違って、まるで未知の世界へ急に投げこまれたような気分だった。いまのわたしは半分死んでいるんだわ、と彼女は思った。五月の空気の中で、わたしだけは、真冬の氷の世界に閉じこめられている……。

「伊原くん……」

部屋へもどると、課長の岸田弘司が声をかけて来た。以前なら、急に残業でも命じられるのではないか、とぎくりとしたに違いないが、いまの加奈子は、悲しいことに、何の動揺もおぼえなかった。それならそれでもいい、と思う。残業をしていれば、少なくとも気はまぎれるだろう……。

「今夜の日生劇場の切符があるんだがね。僕は都合で、どうしても行けなくなっちまったんだよ。よかったら、きみ、どうかね？」

岸田は、いつになくやさしい口調で言った。いかにもやり手らしい、精力的な感じの彼の顔には、唇の端にかすかな笑いが浮かび上っている。それは、ただ単に好意を示しているだけの笑いなのだろうか。仕事にかけてもその道にかけても、大変な凄腕だという噂の人物だから、獲物を前にしたハンターみたいな笑みを浮かべているのだろうか。いまなら、この娘を陥落させるのはわりに簡単だ、とでも思って……。

「ありがとうございます。でも……」

加奈子は口ごもった。

「遠慮することはないんだぜ。今夜、べつに予定はないんだろう？」

何気ない岸田の言葉が、加奈子の胸の中で大きく響きわたった。唇の端の笑いが、彼の顔いっぱいに拡がって、その中から、冷笑とあわれみという二つの言葉が、クローズ・アップされて来るような気がした。今夜、べつに予定はないんだろう……失恋したきみは、どうせ暇をもてあましているんだろう……。

「でも、わたし、ほかに約束があるものですから、せっかくですけど……」

夢中でそんな言葉を口にすると、加奈子は自分の席へ逃げ帰った。背中に、人々の視線が突きささっている。胃の中に、熱湯と氷のかたまりが、同時にとびこんで来たような感じだった。デスクの上をかたづけるふりをして、彼女はしばらくの間、顔を上げようとしなかった。

みんなが知っているのだ。わたしが捨てられたみじめな女だということを……。

いくらか冷静さを取りもどした加奈子は、帰り支度をととのえながら、自分自身に腹を立てていた。わたしは何という、いやらしい、ひがみっぽい女になってしまったのだろう。どうしてすなおに岸田の好意を受けなかったのか。たとえ、彼があわれみや同情をおぼえているとしても、それに反撥するいわれはない……。

涙がこぼれそうになるのを懸命にこらえながら、加奈子は廊下へ出ると、六階のホールで、エレベーターを待つ人人の群れに加わった。ほとんどの人が、せっかちな都会人気質を丸出しにして、一刻を争うように、階数指示ダイアルを見上げている。いつもの習慣で、自分も同じことをし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ているのに気がついた彼女は、ふっと自嘲の笑いを浮かべた。

帰りを急いで、いったいどうしようというのだろう。どうせ味気ない食事をすませて、自分のアパートでひとりぼっちの長い時間をすごすだけだというのに……。岸田がすすめた切符をことわったことを、加奈子はあらためて後悔した。芝居でも見ていれば、少なくとも、気はまぎれるはずだ。

エレベーターが来て、加奈子は箱の中へ押しこまれた。六階から五階へ――そこで扉が開いたとき、石崎秀夫の顔がぱっと眼にとびこんで来て、彼女は思わず全身をこわばらせた。石崎の方も、一瞬、たじろいだような様子だったが、いまさら逃げるのも具合が悪い、と思ったのか、唇を「へ」の字に結んで、そのまま中へ入って来た。

運命の神様はどうしてこんな悪戯をするのだろう、と加奈子は思う。もちろん、このビルの五階も六階も協栄商事が占めているのだから、同じ会社に勤めている石崎が、五階から乗りこんで来るのには、べつに何のふしぎもない。しかし、大きなビルにいくつもあるエレベーターの一つに、同じ時に乗りあわせなくても、よさそうなものではないか。

小さな箱につめこまれた、たくさんの人々の顔が、加奈子の瞳の中で、ぼんやりとかすんで行き、淡い影のようになって、しだいに消えて行った。そして、たった一つの顔が、石崎の顔だけが、眼がくらむほどあざやかに浮かび上っていた。視線をそらそうとしても、なぜか、どうしても彼の方へ瞳が吸い寄せられてしまうのだった。

石崎は、まるで仮面をかぶったように、顔の表情をくずさない。苦味走った、端正なマスク。いかにもエリート社員らしい、精気にあふれた風貌。きらきらと輝いている理智的な瞳――それ自体は、以前と少しも変ってはいない。だが、全体から受ける印象は、まるで違ってしまっている。彼が持っていた、あの温かさはどこへ消えてしまったのか。いまの彼は、まるで氷の彫像みたいだ……。

五階から四階へ、三階へ――エレベーターの動きは、信じられないほど遅かった。小箱の中の空気は重苦しく、熱っぽく、からからに乾いていて、加奈子はいまにも息がつまりそうな気がした。

「さよなら……」

ようやくエレベーターが一階に着いて、拷問の小部屋から解放されたとき、石崎はかすれた声でつぶやいた。黙っているのも具合が悪いが、ほかには言いようがない、といった口ぶりだった。

「さよなら」

加奈子もそれに答えた。いまさら、泣きわめいたところで、どうなるものでもない。ますます自分をみじめにするだけだ。しかし、その短い言葉を何気ない調子で口にする

のには、かなりの努力を要した。

ありふれた日常の言葉も、時と場合によって、ぜんぜん意味が変ってしまう。さよなら――かつて、加奈子が石崎にこの言葉をささやいたときには、甘い悲しみがこめられていた。ちょっとの間でも、あなたと離れているのはつらいけど、仕方がないのね……明日、また会えるんですものね……。

しかし、いまはそうではない。さよなら――それは、フランス語の「アデュー」と同じ意味を持っている。二つの心が離れて行き、二度と出会わない、永遠の別れを告げる言葉であった。

石崎に背をむけると、加奈子は足早にビルを出て行き、丸の内のオフィス街から東京駅へ向う人々の流れの中に入った。外の空気は、エレベーターの中とぜんぜん変らないように思われた。

ふいに、何かしら狂暴なものが、彼女の胸の中にわき上って来た。このまま長距離列車の一つにとび乗って、あてもない旅へ出てみたい。思いっきり、むちゃくちゃなことをやってみたい。酒を飲んで、正体をなくすほど酔っぱらって、行きずりの男に体を与えてしまいたい……。

もちろん、実際にそんなことができるとは思えなかった。やけっぱちになるのには、加奈子は少し理性が勝ちすぎている。なりふりかまわぬ太い神経があれば、石崎とのことだって、あるいはもう少し違った結果になっていたかもしれない。

東京駅の雑踏の中を、山手線外廻りのホームへ向いながら、加奈子は、自分から石崎を奪って行った女のことを考えていた。その娘を、彼女はたった一度だけ、それも束の間、見かけた記憶がある。

それは会社が主催した、あるパーティの会場でのことで、加奈子は受付けの仕事にかり出されていた。そのとき、豪華な振袖に身を包んだその娘が、七色の光の渦を巻きおこして、彼女の前を通りすぎて行ったのだった。色白の、いかにも品のいい美しい娘で、まるでガラス・ケースの中の、高価な人形みたいな感じだった。

たしか、そこには課長の岸田もいて、娘を丁重に出迎え、うやうやしく挨拶したはずである。専務のお嬢さん、という誰かのささやきが、加奈子の耳に入って来た。そのお人形さんは、会社の実力者ナンバーワンで、次期社長は確実、と目されている峰村卓造の娘、悠子だったのだ……。

どうして専務の娘が、会社のパーティに姿をあらわしたのか、そんなことは加奈子にはよくわからない。悠子は海外に留学していたので、英語とフランス語はペラペラだ、という話だから、外人客の多い商事会社のパーティのホステス役にはうってつけだろうし、誰かに花束を贈呈する役でも頼まれていたのかもしれない。

いずれにせよ、そのときの加奈子にとっては、悠子はまったく無縁の存在だった。見事な振袖に眼を奪われはしたものの、べつだん悠子をうらやましいとも思わなかった。美しく着飾ったスターと同じことで、自分とあまりにもかけ離れた世界の住人には、何となく実在感がないような気がしたのである。

だが、しかし……。

加奈子は階段を上って、ホームへ出ると、ちょうどすべりこんで来た電車に、急ぎ足で乗りこんだ。さっきエレベーターを待っていたときと同じように、急ぐ必要なんかないのに、と後で思ったが、いつもの習慣は簡単に変えられるものではない。

サラリーマンの悲しい習性――ふっと、そんな言葉が頭に浮かんで来る。あまり感じのいい言葉ではない。評論家なんかが使えば、いかにも陳腐で嫌味に聞えるし、勤め人仲間で口にするのは、甘ったれているみたいで不愉快だ。しかし今は、その言葉が痛いほどの実感をともなって、胸にせまって来るように思われる。

今度のことで、石崎はいくらかでも、サラリーマンの悲哀みたいなものを、味わったのだろうか。当人は、そういう意味のことを言っていたが、それは正直な気持なのであろうか。ただそんなポーズを作っただけで、本当は天にも上るここちでいるのか……。

石崎と悠子が、どんなきっかけから親しくなったのか、加奈子はよく知らない。石崎が別れ話を持ち出したときにも、その点の説明はしどろもどろだった。

何でも、たまたまある機会に知人から紹介された、というのだが、偶然そんなことになったのか、それともお見合いの形を取っていたのか……専務の峰村が、娘の相手にふさわしい男を物色して、若手の有望株である石崎に白羽の矢を立てた、ということも、大いにあり得るだろう。いまとなっては、そんな詮索をしても始まらないが……。

半年ぐらい前から、石崎の様子が少しおかしい、とは思っていた。彼の都合が悪いことが多く、デイトの回数がだいに減ってきたし、顔をあわせても、以前のような、やさしさに満ちた情熱的な態度が見られないような気がした。何となく、いらいらしているみたいで、恋のムード造りもお座なりな感じで、性急に彼女の体を求めるのだった。

最初のうち、加奈子は、そうした彼の変化が、二人の間に生じた「慣れ」から来たものだろう、と思っていた。自分も反省しなければならない点がある、と考えて、それなりの努力もしてみた。だが、いっこうにその効果はなく、そのうちに、恐ろしい噂が彼女の耳にも流れこんで来た。石崎が専務の娘をものにしたらしい、という……。

加奈子がそのことを問いつめたとき、石崎は狼狽の色を浮かべて、御多聞にもれず、何とかごまかそうとした。ひ

ょんなことから知りあって、二、三度会ったことはあるが、ただそれだけのことなんだ、と彼は言った。

――悠子さんは、うわべはおとなしそうな娘だけど、本当はものすごい我儘娘で、大変なじゃじゃ馬で、とてもついて行けないよ。ただ、専務のお嬢さんの御機嫌をそこねて、変な告げ口なんかされたら、僕の立場がなくなるからね。そこが、宮仕えのつらさというものだよ。

もちろん、そんなせりふだけでは、加奈子の心は安まらなかった。石崎の顔に浮かび上った、あわてふためいた表情が、いつまでも彼女の瞼に焼きついて離れなかった。彼の端正な、ハンサムな顔が、そのとき、急に醜く変ったように見えた……。

新橋から乗りこんで来た若いカップルが、いかにも仲むつまじく、加奈子のそばに立っていた。男が娘の腰に手をまわし、二人はぴったりと寄りそい、うっとりした表情を浮かべている。それを見ていた彼女は、居たたまれないような気持に襲われ、電車が浜松町駅へすべりこんだとき、衝動的にホームへとび出して行った。

見も知らぬアヴェックに嫉妬して、こんなことをするなんて、よっぽど、どうかしている、と思いながら、加奈子はなかば呆然と、電車のドアが閉じられ、若草色の車体が動き出すのを見守っていた。もちろん、次の電車はすぐにやって来る。しかし、いま眼の前で閉じられたドアが、何故か、彼女が日常の次元へ戻るのを拒否してしまったような印象を与えた。

毎日毎日、目黒と東京駅の間を国電で往復していても、加奈子にとって、浜松町の駅はただ通過するだけの、なじみの薄いところだった。何度か、羽田空港へ行くときに、モノレールに乗りかえたことがある程度だ。いわゆる盛り場ではないから、何か用でもないかぎり、まず下りてみる気にはならない。

浜松町のシンボルである貿易センター・ビルにも、彼女は一度も入ったことがなかった。ここと か、先輩格の東京タワーや霞ケ関ビルとか、あるいは新宿の高層ビル群などは、東京の新名所みたいになっているが、そういう場所をわざわざ訪ねてみる東京人は、比較的少ないだろう。地方からの客を案内して、自分も初めて展望台へ上ってみた、というケースが多いのではないか。

加奈子は、夕空にそびえ立つ建物を見上げながら、どうせ早く帰っても仕方がないんだ、と思った。馬鹿みたいな衝動にかられて、この駅で下りたのも、何かの縁というものであろう。多少の気晴らしにはなるかもしれない、と思いながら、加奈子は貿易センター・ビルの中へ入って行った。しかし、チケットを買って、展望台直通のエレベーターに乗りこんだときには、彼女はもう自分の行為を悔み始めていた。

一人だけで、こんな所へ来ているものは、ほかには誰もいないようだ。これではまるで、自分のみじめな姿をさらしに来たようなものではないか……。

展望台の回廊へ出てみると、窓の外には、夕闇に包まれ始めた東京の街並みが、果てしもなく拡がっている。はるか下の通りを、豆粒みたいな車がのろのろと動いている。国電や新幹線も、虫けらみたいに小さくて頼りない。

加奈子はかすかに身ぶるいした。この気違いじみた大都会で、自分はひとりぼっちで生きているんだ、という実感が強くせまって来て、たまらないほどの心細さをおぼえたのだった。

足元の方の浜離宮の緑を見ているうちに、彼女はふっと、郷里の弘前の街を思い浮かべた。お城を中心に、小ぢんまりとまとまった街は、いたるところに緑が見られ、いまでも毎朝、小鳥のさえずりが聞えるくらいである。春の桜、秋の紅葉、お城から眺める岩木富士の美しい姿――それは、このだだっ広い東京とは、まるで違った世界である。そして、そこには地方公務員をしている父と、やさしい母が住んでいる。加奈子が就職したときには、東京で銀行づとめをしていた兄も、いまは郷里の支店へ転任して、両親のもとにいる。

弘前の街や、家族たちの顔を思い浮かべているうちに、彼女は激しいホームシックに襲われた。石崎に失恋して以来、郷里へ帰ろうか、と思ったことは何度もある。しかし、いま東京から逃げ出したら、ますますみじめな思いを味わうだけだろう、という気がして、そのたびに歯を喰いしばって来たのだが……。

新橋、銀座から丸の内方面の、ビルの窓に明りがともり、ネオンが色づき、しだいに濃くなってくる闇の中に、車のテールライトの赤い光の線がえがき出される。またしても、楽しかった日々のことが、石崎とデイトをしたときの記憶がよみがえって来て、彼女の胸は痛んだ。そして、いつか回想の糸は、二人の仲に影がさし始めた頃のことへと、ふたたびたぐり寄せられて行った。

あの頃、石崎はどんな気持で、わたしとつきあっていたのだろう。いらいらしていたのは、悠子とわたしの間の板ばさみになって、彼なりに苦しんでいたからだろうか。宮仕えのつらさを、身にしみて感じていたのだろうか……。

それとも、わたしが邪魔になって、どうすればうまく別れられるかと、そればかり考えていたのだろうか。むやみに、わたしを欲しがったのも、悠子に腫れものにさわるような態度で接していたために、どこかに吐け口を求めたかったからではないのか。それでは、自分があまりにもみじめすぎるが……。

石崎のようなサラリーマン優等生は、当然、相当な野心を持っている。次期社長は確実と目されている人物の娘と

の縁談は、エリートへの道を決定的にするもので、それに魅力をおぼえない男はいないだろう。協栄商事には、かなり同族会社的なカラーがあるから、なおさらのことだ。

たとえ石崎が悠子との話にとびついて、悩みも迷いもなく、あっさり自分を袖にする気になったとしても、それほど強く非難はできないのかもしれない、と加奈子は思う。恋のために、一生を棒にふるような男は、このせちがらい世の中には、めったにいるものではないだろう。自分のために、将来を犠牲にすることを、彼に要求するだけの勇気も、彼女にはなかった。

しかし、そうはいっても、あっさり石崎をあきらめることはできなかった。口惜しくて、悲しくて、石崎や悠子を殺してやりたい、と思ったことさえある。悠子の方は、たぶん加奈子の存在なんか念頭になく、恋人を横取りした、という意識もないのではないか、と思うと、なおさら無念だった。なぜ、悠子のような、すべてに恵まれている別世界の住人が、ささやかなわたしの領域を犯さなければならないのだろう……。

いつの間にか、東京の空はすっかり夜の闇に包まれ、街の明りがあざやかに浮かび上っている。東京タワーの輪郭が、オレンジ色の光の線でえがき出され、道路は流れる光の川に変っている。加奈子はふっと虚脱感と疲労をおぼえて、近くのソファへ歩み寄った。

そのソファには、先客が一人いた。がっしりした体つきのかなりの大男で、としは二十代の後半という見当であろうか。膝の上に本を一冊おいているが、それは閉じられたままで、何やらもの想いにふけっているような表情を浮かべ、煙草の煙をゆっくりと口から吐き出している。連れがいる様子はなかった。

自分のほかにも、こんな所へひとりで来ている人がいるんだな、と思うと、加奈子は妙にほっとした気分になり、その男から少し離れて、ソファに腰を下した。この人もやっぱり失恋したんだろうか……？　そういえば、何となく暗い顔をしているみたいだが……一種の親近感めいたものをおぼえて、彼女はその男をくわしく観察してみた。

ちょっと得体の知れない男、というのが第一印象だった。たくましい体や、浅黒く陽焼けした肌など、いかにもスポーツマンらしいところもあるのだが、たいていのスポーツマンが持っている、明るい陽性の雰囲気が彼には欠けていた。といって、激しい肉体労働に従事しているようにも思われず、ふだん酷使しているのは、たぶん頭脳の方だろう。

太い眉と猛禽類を思わせるような眼、鋭角的なマスクなど、まるでギャング映画の主役みたいな、こわい感じを与える反面、その顔には、ふしぎに暖かい人柄がにじみ出ているようでもある。かなり上物らしい背広を着こみ、ネクタイをきちんと結んでいるが、ふつうのサラリーマンと違

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.